

麻布地域の人々が取材 編集する地域情報紙



アートな麻布に魅せられて⑱ 幻想的な武蔵野図

麻布地区総合支所の中庭に広がる武蔵野の原風景。陶板壁画と景石で構成された、画家・今井俊満氏(1928-2002年)の作品「武蔵野図」である。金色に輝く秋草の群れ、遠くから見下ろすような山なみ。金箔と天然の苔が共存した景石は枯山水風に配されている。場所柄、すでに見知った方も多いかもしれないが改めて紹介したい。

陶板壁画は永久不滅、かも。

壁画は分割された陶板画、いわば陶製のタイルの集合体である。まず原画を撮影し、シルクスクリーンで印刷して転写シートを作成。それをもとに「絵付け⇒焼き付け」を色を重ねて繰り返す。最後に金彩を施し比較的低温で焼く。全部で210枚の陶板を4回焼成するという工程だ。途中、画家自らがブラシを振る職人と現場を共にする。その結果、単なる原画の拡大模写にとどまらない色と質感の創造物が出来上がる。陶製ゆえ、半永久的に色褪せない。また、分割作成したパーツを壁にはめ込んでいるので、景石同様将来的に移設も可能だ。2つの意味で本作品は永久保存可能な形態のアートである。

日本にアンフォルメル旋風を仕掛けた今井俊満。

製作者・今井俊満氏は京都生まれ。裕福な家庭で書画・骨董に囲まれて育ち、幼少の頃より絵画の才能を発揮した。私立旧制武蔵高校卒業後、本格的に画家を目指し1952(昭和27)年単身パリへ渡る。そこで出会ったのが当時最も先駆的だった前衛美術運動「アンフォルメル」*であった。今井氏は中心人物の一人となり、この運動を日本に初めて本格的に紹介。当時の日本の美術界に多大な影響を与えた。

*アンフォルメル:「非定形」を意味するフランス語で、1952年評論家M.タピエの命名による。作家の情動の自発性を強調する非具象的な絵画または彫刻を指し、第二次世界大戦後フランスを中心に展開。

歳月と共に表情を変えている石。ちなみに真下は麻布区民センター区民ホール。



麻布地区総合支所正面ロビー奥のガラス越しに鑑賞できる。

「花鳥風月」時代の本作品とその後・・・

本作品「武蔵野図」は、上述のアンフォルメル時代の抽象画から画風を一転させ、滞在中のパリで1983年より描き始めた「花鳥風月」シリーズにあたる。

「日本の絵が世界で通用するには、日本だけの自然美に取り組むしかない」と、外国にいて気付かされてね(読売新聞1987年1月5日東京夕刊)と当時のインタビューに答えている。

今井氏はその後晩年に至るまで作風を変え続け、終生精力的に活動した。晩年次のように語った。「日本の絵かきは外国のコピーに明け暮れる。または自分のコピーで終わる。私は一所不在、一つところに住まず、道から道へと一生、旅を続けたい」(同新聞2000年12月11日)

歴史の記憶を紡ぎながらも変化を止めないインターナショナルな街「麻布」にも気脈が通じるような言葉だ。

- 取材協力/大塚オーミ陶業株式会社 的場幸雄氏 齋藤哲雄 港区用地・施設活用担当部長
- 参考文献/今井俊満著『花鳥風月』(美術出版社 1989) 堀川浩之編『今井俊満の真実』(藝術出版社 2003) 高橋秀爾監修『西洋美術史』(美術出版社 2002)

(取材・文/大村公美子)



一部分、古画に基づいたしき宮殿や波のような模様がうっすらと描かれている。

お披露目は1987(昭和62)年だった。

麻布地区総合支所の現在の建物の竣工式と同時にこの作品はお披露目の日を迎えた。ちなみに、港区が建築設計に着手した1980年代前半当時は景気が上向き始めた頃。折しも、公共施設建設の際には総工費の1%を芸術・文化のために使おうという欧米発のムーブメントが日本国内でも起こり、アート作品の設置は設計当初から予算に組み込まれていたそうだ。



重層的にススキ・菊・萩・女郎花などの秋草が描かれている。



麻布びと

未来へ残したい麻布の声

株式会社 東京ガーデン
 二代目 小林 徹さん (70)
 三代目 小林 寛さん (36)



飯倉の交差点から神谷町へと抜ける桜田通り。そのオフィスビルの一角に澄んだ空気のみずみずしい生花店がある。創業は、昭和21(1946)年。店を営むのは今年3月、区政功労者として港区から表彰された飯倉町会の会長こと、小林さんご一家。初代の頃から親子で三代、どっしりと麻布に根を下ろす生粋の麻布びとだ。今回は、二代目・小林徹さんと三代目・寛さんにお話を伺った。

アイディアマンの一代目

「私の父は、新潟県小千谷の出身です。昔は長男以外、次男や三男は外へ出された時代ですから、父も上京して東京府立園芸¹に行きました。歴史ある学校で、その24期生です。園芸全般と牧野先生²の植物学なども勉強して、世界各地を回って集めた種子の分類のお手伝いもしました。その後、満鉄³の職員として大陸に渡り、約10年間、鉄道建設の仕事に従事しましたが、終戦とともに引き上げ、麻布台へ。親戚が神谷町で病院をやっていたのがご縁です。戦後ですし、特に夏場、花屋は暇ですから、測候所に電話して、その日の気温を聞いて、当時まだ珍しいアイスクリームも売りました。雪印から仕入れて、慶應ボーイと女子大生をペアにして、皇居や日比谷公園周辺で売り歩いてもらいました。当時の様子はうちでバイトしていた向田邦子⁴さんが、「学生アイス」というエッセイに書いています。大手がアイスクリーム販売に参入する前の、昭和21~27年ぐらゐまでが勝負でしたが、人がやっていない仕事を同級生と二人で始め、大繁盛しました。108坪の土地も買って店を構え、大八車に土を積んで芝公園に撒いたり整えたり、それが『東京ガーデン』の始まりです。」

- 1 明治41(1908)年開校、現在の東京都立園芸高等学校のこと。
- 2 「日本の植物分類学の父」こと、牧野富太郎(植物学者)のこと。
- 3 第9号サ・AZABU『麻布の軌跡:麻布~大連 レールでつなく縁』(2009年3月発行)でも取り上げた南満洲鉄道株式会社のこと。麻布区狸穴町(現・麻布台2丁目の東京アメリカンクラブの場所)に東京支社があった。
- 4 昭和を代表する脚本家・小説家。『父の詫び状』(文藝春秋)に収録された「学生アイス」には、昭和23(1948)年夏、麻布市兵衛町(現・六本木一丁目)にある母方の祖母の家に下宿していた頃、アイスクリーム売りのアルバイトをしたこと、その時の苦労と盛況ぶりが軽妙なタッチで綴られている。

人間力あふれる二代目

そう語ってくれたのは、飯倉町会の会長を務める徹さん。団塊の世代だ。植物学に詳しく初代・正男さんからは木々について教わり、必死にメモしたこともあったという。しかし、高度経済成長やフラワーブーム、バブル崩壊、都市再開発など、街の景色と時代の変動の煽りを受けて、店も花き業界⁵も変化してきた。「まだ物の少なかった父の時代は町の花屋として、庭の手入れからお仏壇から何でもやりました。昔は人が亡くなると花屋に連絡したでしょ。今は葬儀屋さんですが、花の方も葬儀専門、ブライダル専門、ギフト専門の店に細分化されています。うちはギフトフラワーに力を入れていて、特に胡蝶蘭はNo.1の品質。その思いでやっています。」東京都や全国の生花店組合の理事もしている二代目は、港区の地域振興のみならず、花き振興の為にも幅広い視野と人脈の中で奔走している。人と人との縁と絆を大切に、「電球が切れたと言われれば、商売そっちのけで替えに行ってしまう、お人よし。」と溜息をもらすのは、三代目・寛さん。頼まれれば、旅行や切符の手配までしてしまうのが、父・徹さんだという。そんな二代目からは、人情あふれる江戸っ子気質が伝わってくる。



5 切花や鉢花など観賞用の植物を「花き(花卉)」という。「花き」は生鮮食品と同じく、保存の温度が大切。運搬の時に受けるストレスも鮮度を左右する。野菜や果物と同じく、天候や自然災害によって、生産量と価格も変わりやすい。



a.



b.

a. 大正2(1913)年生まれ。園芸高等学校時代の初代・小林正男さん(故人)。
 b. 花屋とバー屋をいっしょにやれば女性が喜ぶだろうと、ふたつ同時に経営した時代もあった。

名キャッチャーの三代目

「僕は父が通った麻布小学校ではなく、私立の初等科にあげてもらいました。」という寛さんは、花という“ナマモノ”を扱い、朝は早く夜は遅い大変な商売を見て育ったせいも、幼い頃から花屋を継ぐ意志はなく、大学卒業後は大手企業に就職した。社会人になって店の経営にも意識が向くようになると、長男としての自覚が芽生え、会社を辞め、市場で働き、市場のことを学んでから家業を継いだ。それから8年。「うちの一番のモットーは、対応力。商品も、僕が自信を持って扱えるものに絞っています。品物の良し悪しはもちろんですが、お客様にここに頼めば安心だね、すぐやってくれるね、というスピード感で、常々の準備は大切にしています。胡蝶蘭はここまで育つのに約7年かかるので高価になるのですが、今は出荷の時期にあわせてクローン技術や開花促進剤などで花を育ててしまう農家もあります。そういうものは、花がもちません。競りもネットで、在宅で出来る時代ですが、商売は人と人との関わりですし、市場に行って自分の目で見て確かめて、納得のいくものだけを仕入れています。お客様の心を花(かたち)として、お届けしていますから。」という三代目の確かな姿勢は、なるほど、店内にずらりと並んだ花々の輝きの一つひとつに、表れている。



豊富な話題が横道に逸れていかないよう、常に気を配る三代目。

創業から72年とは思えないほど若々しいお店は、まさに Rolling Stones—転がる石(に苔むさず)の証。古くて新しい麻布を象徴するかのような麻布びとだった。(Graphic resources designed by Freepik.com)



地元・西久保八幡神社の総代も務める二代目は、元気なうちから店は三代目に任せて全国各地を飛び回る。移動の手段は、小回りの利くスーパーカブ。3年前には、18泊19日かけて、東京から北海道、青森から日本海側を走るバイク旅も!



株式会社 東京ガーデン

港区麻布台1-7-2
 Tel.03-3583-5587 Fax.03-3584-3787
 Email: info@tokyogarden.co.jp
 http://tokyogarden41031.hanatown.net/



リトアニア共和国

面積： 6.5万平方キロメートル

人口： 281.0万人(2018年1月:リトアニア統計局)

首都： ビリニュス

言語： リトアニア語

元首： ダリア・グリボウスカйте大統領

議会： 一院制(議席数141、任期4年)

外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/lithuania/index.html

ゲディミナス・バルブオリス
駐日リトアニア共和国特命全権大使

取材協力/リトアニア共和国大使館

Lithuania

大使を訪ねて 45
麻布の"世界"から

リトアニアはバルト三国として1990年に独立を回復したことも記憶に新しいが、2018年は1918年に帝政ロシアから共和国として独立を果たして100周年にあたる。節目である2018年の4月に赴任されたゲディミナス・バルブオリス特命全権大使(以下大使)にお話を伺った。

日本で感じること

元麻布界隈は閑静な住宅地。狸坂下から再び坂を上ったところに駐日リトアニア共和国大使館がある。大使にまず日本や麻布の印象をお伺いした。「2013年に初めて来日したときはわずか1週間でしたが、とても気に入ったので、赴任できて嬉しいです。東京は高い建物から眺めると大都会なのに、麻布の街は歩くとこぢんまりした家が多く、アットホームで住みやすいですね。大使館には公邸から歩いて通っています。坂が多いですが、それがいい運動になっていますよ」。麻布十番の秋祭りではお神輿もご覧になられた。

日本食は何でも好きだが、特にお寿司が1番のお気に入り。「どんなネタでも食べられます。リトアニア人はお寿司が好きだと思いますよ」。また、日本で印象に残った食べ物はラーメンで、リトアニアからの長旅を癒してくれたとにっこり。今では麻布十番商店街のお気に入りのお店に良く顔を出される。逆に苦手な食べ物をお聞きすると、探すのが難しいなあ……と少しお考えになってから、「すき焼きの生卵くらいです」と答えられた。



(上)リトアニア名物 鮮やかな色のビーツスープ
(下)最近注目を集めているクラフトビール
© www.vilnius-tourism.lt

隠れた名物?クラフトビール

大使は北部の国境に近いパシュヴァリスのご出身。人口約1万人の小さな街だが、土壌がとても豊かで農業が盛んだ。クラフトビールが有名で、昔は各家庭でも作っていたという。近くにあるビルジャイの町はリトアニアビール発祥の地。その歴史は11世紀まで遡り、ミネラル豊富な硬水が個性的なビールを生み出している。美味しいビールがあるからか、リトアニアの一人当たりのビール消費量は日本の倍で、世界ベスト10にもランクインしている。リトアニアビールは2018年7月から輸入を開始しており、東京で飲めるお店もある。興味がある方は足を運んでみてはいかがだろうか。



大使に故郷の味をお聞きすると『バランデーリ』を紹介して下さった。合挽き肉をキャベツで包んで煮込み、地元で採れた茹でジャガイモを添えたリトアニア風ロールキャベツだ。「母が作るバランデーリが世界一ですね」と嬉しそうに話された。また、ピ



クルシュー砂州 ©Gintaras Vitulskis

ンク色のビーツのスープは夏は冷たく、冬は温めて一年中食べられる国民食だ。普段なかなかお目にかかれないリトアニア料理だが、大使館として、みなと区民まつり、麻布十番納涼まつりなど、地域のイベントにも積極的に参加しているので、機会があれば気軽に立ち寄ってほしい。

両国を繋ぐ見えない絆

リトアニアと日本の共通点もお聞きした。リトアニアはヨーロッパで最後にキリスト教化した国で、それまでは精霊や樹木などの自然を崇拝していたところが似ていると感じられたそう。また、意外なところではリトアニアも玄関で靴を脱いで部屋に上がる風習があると教えて頂いた。「遠く離れた国にいるのに、何だか懐かしい感じがしますね」と大使。

リトアニアと言えば、戦時下でユダヤ人6千人の命を救った外交官・杉原千蔵すぎはら ちゆうぞうをご存知の方も多だろう。首都ビリニュスには『スギハラ通り』が、当時の首都カウナスの領事館には『杉原記念館』もある。大使に杉原氏のことを伺うと「大変良い質問をしてくれました」と大きく頷かれた。「杉原氏はリトアニアの英雄であり、日本との架け橋になっています。彼は苦境に立たされている中、たった1人の人間であっても物事を変える力を持っていることを教えてくださいました。カウナスではスギハラウィークがあり、現在でも彼の功績を讃えています。彼の行動は外交官としても尊敬しており、言葉では語りつくせません。私も彼が作った絆を元に、両国の関係を大事にしたいと思っています」と熱く語られた。



日本のシンドラールと言われる杉原千蔵氏。その功績については『ザ・AZABU34号』にも掲載している。

これからの両国の関係

日本からの旅行者も年々増えており、過去5年間で2倍になっている。是非訪れてほしい名所をお聞きすると、湖の中に浮かぶ島にあるトラカイ城、首都ビリニュスの旧市街の街並、前述のカウナスを挙げられた。また、珍しいのはクルシュー砂州の海岸。美しい砂浜に松林が続き、とても良い香りがするスポットで、そこで採れた魚の燻製も名物だ。まさに五感でリトアニアを感じられる場所となっている。

リトアニアは2009年に史上初の女性大統領が誕生したことを皮切りに、女性が活躍している。外務省も女性職員が半分を占め、国連や各国にも派遣されている。大使も「男女ともお互いの実績や経験を活かしながら協力することで良い結果が出せるので、今後も外交・政治・ビジネスでも女性が活躍してほしいと思っています」と話された。この点は私達も見習うべき点だ。反対に日本から学びたいことは健康維持の取組だそう。「日本では高齢者が健康でいきいきと働いているので、国の施策など見習いたいですね」と大使。お互いの国の成功例が課題解決のヒントになるのかもしれない。

リトアニアは遠く離れているが意外な共通点もあり、知れば知る程もっと知りたくなる国だった。先人が育んだ絆もあり、日本に親近感を持って接してくれる人も多く聞く。私達ももっと距離を近づけていきたい。

リトアニア大使館 <https://jp.mfa.lt/jp/jp>
港区元麻布3-7-18

➡マップはp.5を参照

(取材/高柳由紀子、堀内明子 文/堀内明子)

木が動いた!しかも人力で!

平成30年(2018)7月26日実施

南麻布 有栖川宮記念公園のクスノキの大移動

周辺にお住まいの方ならずすでにご存じであろう。この夏、公園の高台、東南側入口近くにあるクスノキが、10mほど内側へ移植された。日本古来より伝わる「立曳き工法」によるもので、港区では前例がないという。現地の見学、そして区と造園会社の担当者への取材をもとに、その稀なる工事の一部始終を記録しておきたい。



移植後1カ月半あまたった9月16日の様子。最低5年ほどは、コンディションをじっくりと見守る必要があるという。

移植方法は入念に検討された

港区は平成28年度より、南部坂から仙台坂方向に抜ける道、正確にいうと都市計画道路補助第9号の拡幅工事に着手した。それにともない、有栖川宮記念公園内の樹木を一部整理する必要が生じた。樹木のコンディションがよければ、移植するなどしてできるだけ保存する。その保存対象として取り上げられたのが、園内の巨木の一つであるこのクスノキだった。高さ18m、幹の目通り(外周)3m近い巨木で、幸いにも菌などによる傷みがなく、伐採の危機を免れた。

樹木を移植するには、クレーン車を用いる方法が一般的だという。しかし樹木を横にして吊り上げるには相応のヤードをとる必要があり、ここでは難しい。トレーラーに乗せて動かすやり方もあるが、周りの環境を大きく壊さなければならない。そこで最終的な手段として残ったのが、「立曳き工法」だった。木製の道具を駆使し文字通り樹木を立てたまま移動するもので、樹木へのダメージも少なくすむ。江戸時代以降に用いられてきた伝統的な手法だ。とはいえ手間も人手もかかる。道具の部材の数量は多く、きちんと保存している業者は今や少ない。現代においては決して容易といえるものではないのだ。今回の工事は、嘉永2年(1849)に創業し、この貴重な技を継承する造園会社の手に委ねられた。

事前の「根回し」と「根巻き」

移植の準備は平成29(2017)年4月から始まった。樹木のまわりを掘って太い根を切断し、薬剤や肥料を与え埋め戻す。細い根の育成を促し、移植後にうまく定着させるのが目的で、「根回し」と呼ばれる作業だ。「根回し」というと、ふだんの会話の中では、事前に各方面に話をつけておくといった意味で使われることが多い。しかしそれはあくまでも比喩としての表現で、本来の意味はこちらにある。実に興味深く思った。

そして移植の半月ほど前に行ったのが「根巻き」。再度掘り起こし、1年余りかけて伸びた細い根を守るため、根鉢全体を不織布で覆い、紙紐を15cm間隔で縦掛ける。しかも、ほどけぬよう紐の交差する箇所すべてに結び目をつくる。近隣に住む筆者は、時々フェンス越しにクスノキの様子を眺めていたのだが、ある日突然あらわれた径6mもの根鉢には驚かされた。迫力満点かつ繊細な幾何学文様を施されたその姿は美しく、まるで工芸品のようだと感じ入った。

立曳き工法

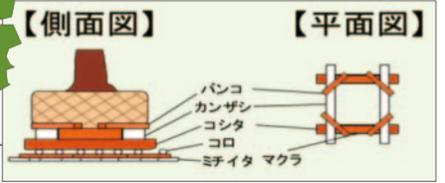


巨木を動かすためのカグラサンを、女性スタッフも混ぜて回す。それほど辛そうではない。

*カグラサンは、漢字では神楽棧。江戸時代後期、捕鯨集団が長崎県に整備した鯨の引き上げに用いたるくろ台にルーツがあり、使用時の動きが神楽舞に似ていたと伝わる。その道具を造園業界で応用したとのことだ。



人との対比で、いかに根鉢がダイナミックなものがわかる。



井桁状の台には樹木を持ち上げて乗せるのではなく、根鉢の下をさらに掘り込み部材を差し込んで構成する。

●資料提供
株式会社 富士植木
図は伊勢造園建設(株)の作成したものを一部修正して使用しています。
●マップはp.5を参照

(取材/加生美佐保、田中亜紀 文/田中亜紀)

大スペクタクルショー!!

連日の猛暑が幾分和らいだ7月26日、いよいよ本番の日を迎えた。現地には関係者が総勢30~40人ほどいたであろうか。筆者も取材者としてヘルメット着用で見学した。

移植の装置は準備万端で、それ自体がダイナミックなものだ。移動する方向へ大きく溝が掘られ、10m先に土で固めた着地台が見える。樹木から着地台までは、「コロ」「ミチイタ」といったいわば線路のような部材が設置されている。そして井桁状の台に乗った樹木にはワイヤーが巻き付けられ、そのワイヤーは支柱を経由し、後方の「カグラサン」と呼ばれる十文字型の巻き取り機に接続。このカグラサンを人力で回すとワイヤーが引っ張られ、樹木がミチイタに沿って移動する。滑車の原理を応用したしかけで、推定80tのこのクスノキは、わずか8人ほど、一人あたり6.2kgの力で動かせるのだという。

10時、工事スタッフが「よいしょ、よいしょ」のかけ声とともにカグラサンを回し始めた。だがすぐに樹木が大きく移動するわけではない。カグラサンの部材が浮いてきてワイヤーがスムーズに巻き取れないのだ。浮きを抑えるために部材を木槌で打ち付ける。すると、少しずつ、すっと動く。その繰り返しはどれほどなされたであろうか。結局、10時50分に1m50cm、11時10分に3m、11時38分には6m、そして無事、着地台に到達したのは12時だった。通行人もフェンス越しに固唾をのんで見守り、クスノキが動く度に起こるどよめきが木々の間に響き渡った。

何もかもが機械やコンピューターで制御される現代、人の手と昔ながらの工具だけで巨木を移植させる現場に立ち会えたことは、千載一遇の機会であったかもしれない。

クスノキは現在、竹垣に囲われ何事もなかったかのように鎮座している。だが根を切られ、ワイヤーで引っ張られ、どれほどの受難の日々であったことか。どうかしっかりと根を下ろし、またあのやわらかな若葉を見せてほしい、と願うばかりである。

●お話を伺った方
港区麻布地区総合支所 まちづくり課まちづくり係 加賀 豪さん
株式会社 富士植木
コミュニティビジネス推進部 取締役部長 樹木医 山下得男さん
企画開発第1部 課長補佐 益野洋一さん



移植工事当日の午後、着地台に到達。手前がコロ、ミチイタによる軌跡。このあと下の井桁状の部材を外し、翌日には完全に土が埋め戻されていた。



移植工事前、7月17日に筆者が目にした根鉢。



1975 (昭和50)年



2012 (平成24)年

- ① 写真右手は有栖川宮記念公園、左手はドイツ大使館。大使館の壁面はまだ無かった。
- ② 現在は街灯も刷新され、壁面に囲まれながらも遠くまで見渡せる。
- ③ 写真右手のナショナルスーパーマーケットが改築中である。
- ④ 写真からは見えないがこの頃からナショナルスーパーマーケットはあった。駐車場入り口の看板も懐かしい。



2018 (平成30)年

季節は冬真ただ中。ふと思えば「赤穂浪士の討ち入り」は12月14日。高輪の泉岳寺では毎年義士祭が行われている。一見麻布とは縁もゆかりもない事柄に見えるが、調べてみれば案外違う結果が出てくるかも知れない。今回はそんな「縁」を辿ってみたいと思う。

2つの南部坂

麻布地区の中でも比較的急峻な坂の部類に入るのはないだろうか。坂名は有栖川宮記念公園の場所に南部盛岡藩の下屋敷があったことに由来する。実は全く同じ由来の坂が赤坂にある。忠臣蔵の名場面の1つで、大石内蔵助が浅野内匠頭の妻瑤泉院に暇乞いに訪れた「南部坂雪の別れ」の舞台となった坂だ。これは1656(明暦2)年に盛岡藩中屋敷(南部家)と赤穂藩下屋敷(浅野家)の相対替えが行われたことによる。端的に言えば麻布の「南部坂」の方が新しく、有栖川宮記念公園の前身は赤穂藩下屋敷であった、ということになる。

むかで姫

少し脱線するようだが、南部家に纏わる不気味ながら面白いエピソードがあった。盛岡藩初代藩主・南部利直に嫁を取る話が持ち上がる。相手は本情報紙44号の表紙にも登場した蒲生氏郷の娘(一説に養妹とも)於武の方である。彼女が輿入れの際に持参した引出物がいわゆる「鱈尾兜(燕尾形兜)」であり、今一つは先祖が「むかで退治」で使った矢の根石だった。恐らくは父親である氏郷が、蒲生家は由緒ある家柄であることを証明するために持たせたものと思われるが、受け取る南部家もさぞ面食らったことだろう。嫁入りの引出物が「兜」と「矢(の根石)」だったのだから。それが発端という訳でもないが、彼女が亡くなった際、遺体にむかでの這い回っているような模様が浮かび上がり、人々は「むかでの呪い」と慄く。当代藩主の計らいでむかで除けの堀をめぐらせた(むかでは水が苦手)墓を建て、堀を渡る橋を架けさせた。ところがその橋が一夜にして破壊され、何度も架け直そうとするも、むかでが現れては橋を破壊してしまった。遂には墓から大小のむかでが湧き、於武の方の髪は片目の蛇になって石垣の隙間から這い出てきた。この話は無論伝承であり事実には程遠い。だが、ここで気になるのは「むかで退治」と彼女(と氏郷)のご先祖様の存在。

俵藤太

二人のご先祖様の名前は藤原秀郷。平安中期の関東の武将で、平将門を討った張本人。彼は武勇に優れ弓矢の名手でもあったために伝説が生まれた。それが「三上山のむかで退治」と呼ばれている。ある日秀郷が近江国瀬田の唐橋を渡ろうとすると、大蛇が横たわっていた。ところが秀郷は何も臆する事なく大蛇を踏みつけて渡ってしまった。その夜一人の娘が訪ねてきて「私は大蛇の化身で、琵琶湖の竜王の娘です」と名乗った。三上山を七巻き半もする大むかでに悩まされ、助けて欲しいと頼みにきたのだ。これを快諾した秀郷は見事大むかでを射抜き退治した。その褒美に彼女から贈られた品の中に「尽きることがない米俵」があった。この伝説故に秀郷の別名「俵藤太」が生まれた。「藤太」は藤原氏の長(太郎)を表している。源氏、平氏に並ぶ武家の棟梁として多くの家系を輩出していくのである。

藤太の縁

於武の方と蒲生氏郷は藤原秀郷流の家系で伝説が伝説を呼んでしまった。が、不思議なことに「藤太の縁」と言おうか、秀郷流には最前の大石内蔵助がいる。「忠臣蔵」も事実に基づく講談(架空の話)ではあるのだが、「南部坂雪の別れ」とは奇しくもその真ん中に藤原秀郷がいるように思えてならない。南部家の相対替えの相手が浅野家であったこと、二つの南部坂が残ったこと、「藤太の縁」を少なからず感じるのは私だけだろうか。ちなみに「むかで姫」と呪いの権化のように言われた於武の方だが、91歳の長寿を全うしており、墓建立にまつわる騒動はその寺の住職が供養したことによって収まったようだ。蛇足ながら、「矢の根石」を贈った蒲生家はその後間もなく改易となり、受け取った南部家は明治以降も家系を保った。



2012 (平成24)年



2018 (平成30)年



1975 (昭和50)年

※①、⑥ 撮影：田口正典氏、提供：田口重久氏

麻布未来写真館

縁を感じる坂、南部坂



自分の大切な兜を引出物として差し出す氏郷の親心をも南部家は大切にしていたのだ。もののふの「縁」を現在(いま)に買った証だ。写真提供：岩手県立博物館



「麻布未来写真館」とは

港区麻布地区総合支所では、地域への共感や愛着を深めていただくため、麻布地区の歴史やまちの移り変わりを記録、保存、継承する活動を行っています。麻布地区の定点写真の撮影、昔の写真の収集等については、港区在住、在勤、在学者で構成された区民参画組織「麻布を語る会 麻布未来写真館分科会」が主体となって活動しています。まちの歴史や文化を多くの方々を知っていただけるよう収集した写真をパネルとして港区ホームページや展示会で紹介していますのでぜひご覧ください。

「麻布未来写真館」では、古い写真を探しています!
 明治から昭和にかけての麻布地区の建物や風景、お祭りなどの写真を募集しています。詳しくは、港区麻布地区総合支所 協働推進課 地区政策担当までご連絡ください。
お問合せ 電話:03-5114-8812



3 ハラル料理に舌鼓



在日23年になるシェフ、アズィーグ・ラハサン氏はモロッコの方。日本語も上手です。右は佐藤裕一氏。

みなさんは「ハラル」という言葉を耳にしたことがありますか？外国人客の多い麻布界隈のスーパーを覗くと、イスラム教徒のための、ハラル認証を受けた、ハラル食品のコーナーを目にすることができます。ハラルの意味を探りながら、今回は元麻布にあるアラブイスラム学院(以下学院と表記)の「イスラムの食文化講座」にお邪魔しました。



元麻布の住宅街の一角にそびえるアラブイスラム学院。

「ハラル」と「ハラーム」を学ぶ

学院はサウジアラビア王国の国立イマーム・ムハンマド・イブン・サウード・イスラム大学が運営。1982年、日本とアラブ・イスラム世界の関係強化のために設立されました。世界で2億人以上が話すアラビア語は、国連が定めた6つの公用語のひとつ。学院ではアラビア語を学ぶと共に、アラビア文化に親しんでもらうため、様々なカリキュラムが用意されています。

年に数回開催の集中講座の一つが「アラブ料理教室」5日間コースで、誰でも参加できます。主に女性の先生が、アラビア語、時々日本語と英語を交えながら、調理実習するもの。その他、アラビア書道や、アラビア文字入門など内容は多彩で、スケジュールは学院のHPに掲載され、申し込みます。(http://www.aii-t.org)

一方、調理実習無しで、イスラム食文化についてのレクチャーと実食を楽しむのが、今回紹介する講座です。

学院長ナーセル・ムハンマド・アルオマイム博士(Dr. Nasser Mohammed S. ALOMAIM)の、より地域の方々とのふれあいを大切にしたいという意向をふまえ、区内で活動するNPO団体、一般社団法人、公益社団法人港区シルバー人材センター歴史ガイド倶楽部などからの申し入れに応じています。

レクチャーの担当は学院研究員、サウジアラビアでの滞在も長い、佐藤裕一先生。話の趣旨を簡単にまとめてみます。

- ・イスラム教徒は、中東に多いと思われがちだが、インドネシア、パキスタン、マレーシア、バングラデシュなどアジア地域やアフリカ諸国にも、多くの信者がいること。
- ・イスラムの食文化は世界多岐にわたるが、「食事は宗教の一部」という教えは共通。主に「ハラル」と「ハラーム」に分けられること。
- ・ハラル、ハラーム共に食に限らず、それをしてもしくなくても、罪とはならない物事をハラル、逆に、それをすれば罪となるのがハラームである。

豚肉とアルコールは「ハラーム」なので口にしない

イスラム教徒は日に5回の礼拝が課せられています。また、イスラム暦の第9月をラマダンといって、その1ヶ月間は、日の出の1時間半ほど前から日没まで断食を行います。よってこの時期は、夜遅くの食事となります。私たちが用いている太陽暦は1年が365日ですが、イスラム暦は月の満ち欠けが基準のため、1年は354日。ラマダンの時期が毎年異なるのは、イスラム暦に合わせているからです。因みに2019年は、5月5日頃から6月3日です。

そして食生活においては、豚肉とアルコール類は口にしません。ハラームと定められているからです。牛、鶏、羊などは普通に食いますが、厳密にはイスラム教にのっとった屠殺の方法で処理された肉を頂きます。

意外な食品の落とし穴に、参加者から驚きの声

佐藤先生のレクチャーも佳境です。「ハラルとハラームの違いがお分かり頂けたかと思いますが、ここでクイズです。この食べ物ハラル、ハラームどちらでしょう？」

スクリーンに映し出されたのは、私たち誰もが知っているスナック菓子。豚肉もアルコールも含まれていないと思いきや、パッケージの裏が拡大されると、そこには材料の一部に豚肉エキス、とあります。実はハラームの食品でした。

「では、こちらは？」画像は梅酒の缶です。お酒だからハラーム、と受講者の声。よく見ると「アルコール0.00%」の表記、つまり、お酒ではないので飲んでもよい、ハラル食品になるのです。

本日のメインイベント 実食へ

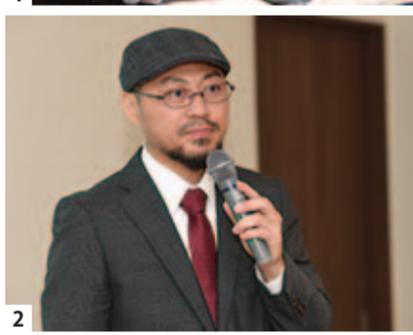
レクチャー後は、男女別の礼拝堂、各国の言語に翻訳されたコーランが並ぶ図書館、礼拝前に手足を洗える広々とした洗面所など学院内の施設を見学します。そしてダイニングルームでは、ラハサンシェフ御自慢のハラル料理がずらりと並びます。プuffスタイルですが、その前に各料理名と簡単なレシピの説明があります。

アラブ・イスラムのハラル料理は、暑い国だから、スパイシーで辛そう、というイメージをもたれるようです。本日は大皿が14皿！ひよこ豆のペースト「フムス」、茄子とひき肉の煮込み「ムサッカア」、メインのラムのグリル・サウジ風「ハルーフ マシュウイ」などなど。サウジアラビアでも米を食べますが、本国では収穫できないため、インディカ米は輸入しています。日本でおなじみの「クスクス」にも野菜がたっぷり。パンはまん丸のピタパン。デザートもおなじみのカスタードプディングや細麺状の小麦粉で作った「クナーファ」。

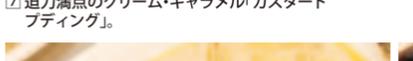
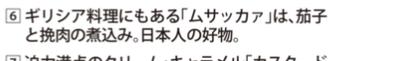
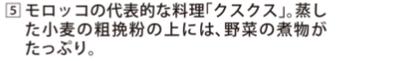
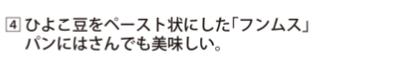
本来は床に座り、右手で頂きますが、今回はテーブル席で、フォークとスプーンを使って。「辛い料理がなくてびっくり」「とても食べやすく、やさしい味」「初めて食べましたが、どれも美味しい」と、大好評でした。

ハラル料理ってな～に？からスタートした今回の「イスラムの食文化講座」。レクチャーと実食で、より親しみを感じるイベントでした。イスラム教の理解と、多彩なハラル料理を通じて、日本におけるハラル食文化がよりいっそう深まっていけばいいなと思える、楽しく美味しい取材でした。

協力/アラブイスラム学院
港区元麻布3-4-18 電話/03-3404-6622
→マップはp.5を参照



1 学院長ナーセル・ムハンマド・アルオマイム博士。
2 スライドを使いながら、わかりやすくレクチャーする佐藤先生。
3 ダイナミックな羊のグリル料理「ハルーフ・マシュウイ」やピタパン、サラダを載せて。



ボリューム満点のプuff料理がずらりと並びます。



礼拝堂は男女別になっています。

港区基本計画・麻布地区版計画書に計上する地域事業について

麻布地区総合支所は、地域を取り巻く状況の変化を踏まえ、施策の成果や課題の検証を行い、平成27年3月に策定した「港区基本計画・麻布地区版計画書※」を本年3月に見直しました。

このコーナーでは、麻布地区版計画書に計上されている9つの地域事業の内容について、3回に分けてご紹介します。

※計画期間は、平成27(2015)年度からの6か年の後期3年に該当する、平成30(2018)年度から2020年度までです。

※47号(平成31年3月発行予定)でも、麻布地区の地域事業についてご紹介いたします。

麻布地区版計画書はこちらから▶

港区ホームページ
http://www.city.minato.tokyo.jp/

港区基本計画 検索



AZABU WORLD FESTA

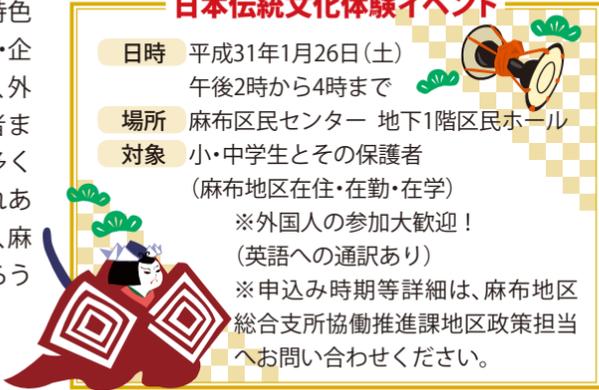
国際色豊かな地域の特色を生かし、商店街・大使館・企業・自治体等と連携して、外国人、子どもから高齢者まで国籍、世代を問わず多くの方が地域の方々とふれあい、文化・歴史資源を巡り、麻布への関心を深めてもらうイベントを実施します。

日本伝統文化体験イベント

日時 平成31年1月26日(土)
午後2時から4時まで

場所 麻布区民センター 地下1階区民ホール

対象 小・中学生とその保護者
(麻布地区在住・在勤・在学)
※外国人の参加大歓迎!
(英語への通訳あり)
※申込み時期等詳細は、麻布地区総合支所協働推進課地区政策担当へお問い合わせください。



ご近所情報満載! 地域SNSアプリ「PIAZZA」で、暮らしに役立つ「つながり」を育もう!

麻布・六本木エリアで展開中! PIAZZAで麻布での暮らしがもっと楽しくなる



PIAZZAとは、イタリア語で「広場」という意味で、身近なイベントや日常の暮らしに関する情報交換、不用品のやり取りなどを通じて、地域密着型のコミュニケーションを促進するためのアプリです。

現在、7月からオープン(※)した「PIAZZA 麻布・六本木エリア」には、「お祭りを開催します」「ベビーカーをお譲りします」「ペットOKのカフェがあります」といった、麻布地区を中心とした暮らしに役立つ地域情報が集まっています! 防犯・防災、子育て等の行政の情報も適宜投稿されますので、「引越してきたばかりなので地域の事をもっと知りたい」「子育て仲間がほしい」、そんな方はぜひ一度「PIAZZA」をお試ください。

※平成30年7月12日に港区、港区麻布町会・自治会連合会、「PIAZZA」を運営するPIAZZA株式会社で協定を締結し、「PIAZZA」内に「麻布・六本木エリア」を開設

あなたの情報が誰かの役に立ちます!
麻布を楽しみたい人はぜひご登録ください。

登録方法

- STEP① PIAZZAアプリをダウンロード
- STEP② メールアドレスかFacebookアカウントで登録
- STEP③ 名前や出身地などを入力



アプリはこちらからダウンロードしてください

お問合せ/麻布地区総合支所協働推進課協働推進係
電話/03-5114-8802

オレオレ詐欺・還付金詐欺被害に要注意!

不審な電話がかかってきたら、絶対に個人情報を教えず、本物の家族に連絡し、警察に相談してください。また、警告音声が出る迷惑電話防止機能付電話機の設置をお勧めします。

お問合せ/麻布警察署防犯係 電話/03-3479-0110 (内線2162)

地域事業とは

麻布地区
地域事業

麻布地区の実情や特有の課題、その解決の方策等を盛り込み、麻布地域の魅力を高めるために、3か年の年次計画を立て、重点的に取り組む事業です。

みんなでまちをよくする「ミナヨク」



20代から40代を対象に、「知(地域やアイデアのつくり方を知る)」、「感(地域を実際に見て、話を聞く)」、「創(地域をよくするアイデアを考える)」、「共(地域の皆さんに共感してもらう)」を行う講座「ミナヨク」を実施します。

また、講座参加者のアイデアの実現に向け、講座修了生と地域との連携を支援するとともに、講座修了生同士の交流の場を創出することで、継続的に地域コミュニティに関わりが持てる取組を実施します。

麻布未来写真館～次世代へつなぐ麻布の記憶～

区民参画組織「麻布を語る会 麻布未来写真館分科会」が主体となり、麻布地区の昔の写真を収集するとともに、定点写真等を撮影し、まちの変化を保存していきます。

また、企業、大学、他の地域事業との連携によるパネル展の開催、ICT(情報通信技術)を活用した写真パネルの公開を行います。

お問合せ/麻布地区総合支所協働推進課地区政策担当 電話/03-5114-8812

麻布地区
地域事業

【麻布地区地域サロン事業】

“ちょこっと立ち寄りカフェ”にお越しください

麻布地区総合支所では、地域の高齢者の皆さんが気軽に立ち寄って楽しく交流できる場所として、「ちょこっと立ち寄りカフェ」を開催しています。どなたでも気楽な雰囲気でお茶やコーヒーを飲みながら、おしゃべりや季節のイベントなどを楽しんでいただけます。毎月、麻布地区のいきいきプラザ4館で開催しています。ぜひ、ちょこっと立ち寄ってみてください。地域のボランティアも皆さんのお越しをお待ちしています。



会場及び内容(予定)

※2月はお休みです。プログラムは変更することがありますのでご了承ください。イベント、講座、ゲームなどを行っています。

◆ 飯倉いきいきプラザ 東麻布2-16-11	◆ 西麻布いきいきプラザ 西麻布2-13-3
1/9 (水) 新年お楽しみ会 3/6 (水) スプリングコンサート	1/17 (木) おりがみで新年 3/21 (木) 春の落語
◆ ありすいきいきプラザ 南麻布4-6-7	◆ 南麻布いきいきプラザ 南麻布1-5-26
1/10 (木) 新春お楽しみ会 3/14 (木) 「さわやかレディース&フレンズ」の演奏	12/19(水) クリスマス会&演劇で楽しく学べる「振り込め詐欺被害防止講座」 1/23 (水) アコーディオン演奏と歌 3/27 (水) 歴史を語るIV ～大使館とお墓～

時間 毎回午後1時30分から午後3時30分まで 対象 どなたでも

参加費 100円(茶菓子代含む)

申込み 不要です。直接会場にお越しください。

お問合せ/麻布地区総合支所区民課保健福祉係 電話/03-5114-8822

地域の活動～南麻布富士見町会祭礼～

平成30年9月15日(土曜日)・16日(日曜日)に南麻布富士見町会祭礼が行われました。

南麻布富士見町会は、秋祭りを通じて、地元外国公館であるフランス大使館・ニューサンノー米軍センターとの交流を続けており、今年は大使公邸で御輿の巡行を行いました。

大使館側要人である、ローラン・ピック駐日フランス大使、ジャン＝パティスト・ルセック在日フランス大使館公使と、南麻布富士見町会の清原元輔会長が大使公邸への巡行を3年ぶりに再開しました。大使館が用意してくれた美味しいワインやクッキーなどを囲み、町会員約400名とともに盛大なレセプションが開催されました。大使館からは、今後も地域の一員として協力関係を保っていききたいと発言がありました。



港区麻布地区総合支所だより



麻布地区
地域事業

～「六本木安全安心憲章」制定5周年～周年企画「もっともっとZERO ROPPONGI」

六本木からまちのルールを
発信しています

港区では、六本木を安全で安心なまちにするため、町会・自治会、商店街、事業所、関係機関とともに、地域ルール「六本木安全安心憲章(※)」を平成25年7月23日に制定しました。

※「六本木安全安心憲章」とは、六本木のまちの安全・安心のための“シンボル”となる六本木地区の独自ルールで、六本木が目指すまちの姿を宣言するとともに、まちですべての人が守るべきルールを示したものです。



ルール違反 ゼロの六本木へ。
合い言葉は、ZERO ROPPONGI
Toward a Roppongi with ZERO violations.
Our slogan is ZERO ROPPONGI

「六本木安全安心憲章」を制定し
5周年になりました

平成30年7月で「六本木安全安心憲章」は制定5周年を迎えました。このことを好機とし、まちのルールの更なる浸透とまちの賑わいを目指して、「もっともっとZERO ROPPONGI」を合言葉に、様々な企画を行ってまいります。

主な企画

店舗等との コラボレーション企画

六本木の店舗や事業所で、ZERO-ROPPONGIの紹介ポスターや卓上フラッグ、コースターなどを使用して頂きます。六本木を訪れる人に「六本木安全安心憲章」を知ってもらうため、店舗等の皆さまにも一翼を担って頂きます。



六本木街路灯への フラッグ掲出

12月1日から12月30日にかけて、六本木交差点を中心に、街路灯に5周年ロゴマークのフラッグを掲出します。



※写真はイメージ

地上用変圧器への掲出

12月1日から、六本木交差点を中心に、東京電力が所有する地上用変圧器10基へZERO-ROPPONGIのイメージマークを掲出します。

賛同いただける店舗・事業所等を 募集しています

憲章に賛同いただける店舗・事業所(以下、事業所等)を募集し、応募いただいた事業所等の名称を港区ホームページ等で公表します。詳しくは、以下のQRコードリンク先または麻布地区総合支所で配布する募集チラシ等を参照してください。



六本木安全安心憲章
QRコード

活動に参加しませんか？

「清掃・啓発活動」と「客引き防止パトロール」を主なテーマとして、毎月1回程度、町会・自治会、商店会、事業所等、関係行政機関の皆さんとキャンペーン活動を行っています。

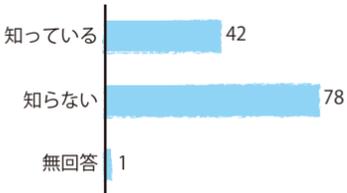
多くの区民、事業者等の参加をお待ちしております。活動に興味のある人は、お気軽にお問い合わせください。

お問合せ／麻布地区総合支所協働推進課協働推進係
電話／03-5114-8802

『ザ・AZABU』第42号読者アンケート結果報告

アンケートに御協力頂き、誠にありがとうございました。結果および皆様から頂いたご意見をご紹介します。

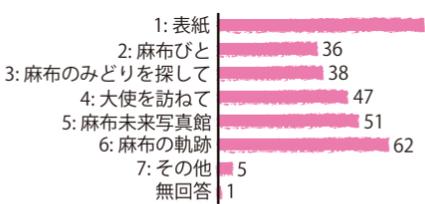
「ザ・AZABU」は公募区民が取材・編集を行っているのと知っていましたか？



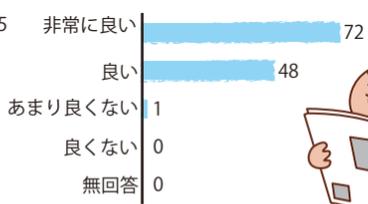
「ザ・AZABU」をどのような方法で 手に入れましたか？



第42号で興味・関心を持った記事は？



「ザ・AZABU」の評価は？



皆様からいただいた主なご意見

- いつも楽しく読ませていただいております！今後も楽しみにしております！！
- 港区に住む外国人の方達は、港区内のどんなお店やスポットで楽しんでいるのか。子ども達はどこで遊んでいるのか知りたいです。
- 防災特集などお願いします。今後も楽しみにしております。
- この地域に住んで10年以上になりますが、歴史的にも建造物的にも重要な場所が多くあることをこの情報紙を通じて知ってきました。麻布地域は更なる変化が起こりそうですが(再開発等)今後も重要な歴史を今の世代に伝えてほしいと思います。古い写真を多く掲載していただけると、なかなか見る機会も少ないので嬉しいです。今後も楽しみにしております。
- 毎号楽しく拝見させていただいております。六本木に住んで70年、まだまだ知らないことがこんなに身近に多くあることにいつも驚き新鮮な発見です。若い方達が一生懸命訪ね歩いて素晴らしい情報を提供して下さい感謝です。母校の東洋英和で育って、麻布以外の地域に住んでいる友だちに時々送って喜ばれています。これからも楽しみにしています。
- 歴史、史跡等。今も数多く掲載されておりますが、もっともっと知りたいと思います。この地に住み、この地を知り、この地を愛する、そんな区民になりたいと思っております。友人等来客があった時散歩するのが楽しみで、その際AZABUで知った知識が大変役に立ち友人にも喜ばれております。



「ザ・AZABU」
編集事務局から

いつも「ザ・AZABU」をご覧頂き、誠にありがとうございます。今回皆様から頂いたご意見を参考にさせて頂き、よりお楽しみ頂ける地域情報紙をつくっていきたく思います。今後とも、どうぞ宜しくお願い致します！

買い物
するなら
地元の
商店街で

ザ・AZABUへの
ご意見・ご要望を
お寄せください

住所・氏名・職業(学校名)・電話番号・ご意見・ご要望(日本語又は英語、字数・様式自由)を書いて、直接又は郵送・ファックスで、〒106-8515 港区六本木5-16-45 麻布地区総合支所 協働推進課 地区政策担当へ。

●電話／03-5114-8812 ●FAX／03-3583-3782

地域情報紙「ザ・AZABU」は
ホームページからも
ご覧になれます。



「ザ・AZABU」は英語版
も発行しています。

ザ・AZABU

●配布設置場所ご案内
六本木1丁目、六本木、広尾、麻布十番、赤羽橋の各地下鉄の駅、ちいばす車内、みなと図書館、麻布図書館、南麻布・ありす・麻布・西麻布・飯倉の各いきいきプラザ、麻布区民センター、麻布地区総合支所等
●本紙掲載の記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。

Chief 田中亜紀
Sub Chief 高柳由紀子
Staff 出石供子 田中康寛
おおばまりか 中嶋 恵
大村公美子 西森瑞穂
加生武秀 畑中みな子
加生美佐保 堀内明子
小池澄枝 堀内賢三
田岡恵美

編集後記

今号の「麻布未来写真館」でご紹介した、赤坂氷川神社の地にかつて(浅野家の屋敷ができる前は)南部家の屋敷があり、その当時は有栖川宮記念公園の地に浅野家の屋敷があった、という事実。高輪には泉岳寺が、芝には日比谷通り沿いに「浅野内匠頭終焉之地」碑が、そして赤坂だけでなく麻布にもあった浅野家の歴史・・・芝・赤坂・麻布の3区が合併した港区は、忠臣蔵の「見えざる引き寄せの力」でできたのかも？と思いました。(加生武秀)

「みなとコール」は暮らしの疑問にまとめてお答えします！

区役所のサービスや施設案内、催し情報など、お気軽に問合せください。
年中無休/午前7:00～午後11:00 ※英語での対応もいたします。

電話／03-5472-3710 FAX／03-5777-8752
お問合せフォーム／<https://www.city.minato.tokyo.jp/kouchou/kuse/kocho/iken/form.html>

“Minato Call” information service
Minato call is a city information service, available in English every day from 7 a.m. - 11 p.m.
Minato Call: Tel: 03-5472-3710; Fax: 03-5777-8752;
Inquiry submission form: <https://www.city.minato.tokyo.jp/kouchou/kuse/kocho/iken/form-inquiry.html>